

博士學位論文要約

論文題目： 動物介在プログラムの組織的機能に関する評価研究
—ヒューマン・サービス分野を中心事例として—

氏名： 中村 智帆

要約：

本論文では、教育、医療、キャリア開発分野など近年急速に拡大している対人的な直接援助を含むヒューマン・サービス分野における動物介在プログラムの組織的機能を多角的に評価し、組織へ犬などの動物を導入すること、つまり、動物介在プログラムを導入することの意義について個々の組織成員の情意や成員間の関係性への影響なども含め論じている。

人と人のつながりが薄れていると言われる現代社会では子どもから成人、老人に至るまでさまざまな問題が浮き彫りになっている。物質的には豊かであるが、一方では核家族化や近隣関係の崩壊、地域力の衰退など個々の立場で生活するようになったこと、そして何よりも他者に対する想像力の欠如などが根底にあると考えられる。教育機関においては子どもたちの諸問題の解決方法の手段が模索され実践されているところではあるが、社会的病理の改善そして解決のためにも子どもたちの教育には他者を知り他者へ思いやりを持つことを学ぶことは大切になると考えた。そのための手法として、教育機関に動物を、とくに温かみがあり人間と愛情と共感を分かち合うことができる動物を、導入することが子どもを取り巻く諸々の問題の解決に資するのではないかと考えた。そして、動物の、とりわけ犬の存在が子どもたちだけではなく、社会的ないし人間関係の問題をも解決する手がかりになるのではないかと推測し、各組織に応じた計画（プログラム）を立案し犬を導入している（＝動物介在プログラム）事例を探し検討を進めることで答えを導き出せるのではないかと考えた。したがって、10の事例と3の活動事例を政策学の観点から実地に分析することで動物介在プログラムの組織的機能を明らかにすることを試みた。本論文では人間と動物、子どもと動物について研究されているものや動物が及ぼす生理学的効果を参考とし、各組織のフィールド調査（参与観察、聞き取り調査、アンケート調査）から得られた結果をもとに分析をおこなう。なお、参与観察においては、組織成員の情緒や情意の変化を読み取ることができるよう組織成員の言動を忠実に記録し再現できるよう心がけている。

本論文は序章、第1章から第14章、終章によって構成される。各章の概要は以下のとおりである。

まず序章では、問題の所在、研究の目的および方法、論証されるべき仮説等について述べた。

第1章では、人間と犬とのかかわりの歴史や一般社団法人ペットフード協会がおこなった全国犬・猫飼育実態調査と先行研究をもとにペットを飼育することの好ましい影響やペット飼育の生理学的効果を明らかにしている。人間と犬とのかかわりは家畜化の歴史の中

で最も古く、人間は犬とともに長い間よりそい生きてきた。また、ペットを飼育することが人の健康促進や癒しとなること、とくに犬は、動物の中でも人と積極的にコミュニケーションをはかることができることから人と人をつなぐサポートを担っていた。第2章から第9章、第11章と第12章ではヒューマン・サービス分野でおこなわれている動物介在プログラムの事例を提示し、各組織の動物介在プログラムの組織的機能を明らかにしている。事例分析では、現場の様子や犬などの動物に関わる組織成員の情緒や情意の変化にも着目した。

第2章では、愛知少年院の事例について検討している。犬を介在させたプログラムは、犬とのふれあいを通し被収容少年の気持ちを癒すこと、心情の安定を図ることや生命の尊さを教えることを目的としており、出院準備教育期間中の生活指導領域項目において実施されている。このプログラムを参与観察しエスノグラフィーの形式で分析をおこなった。分析の結果、ラベリング理論の面から見ても、院生たちを見た目で判断することがない犬とのかかわりは極めて重要であり少年院の矯正教育に犬を介在させたプログラムが必要であることを明らかにしている。

第3章では、岡山少年院の事例について検討している。職員有志で実施されている犬を介在させた取り組みは、入所少年たちの癒しの目的や生命を育てる大切さを学ぶ教育として実施されており、入所少年たちの日誌から犬の飼育を通して他者を思いやる気持ちを育むことができたことを明らかにしている。

第4章では、児童自立支援施設 修徳学院の事例について検討している。真正の夫婦のもと犬などの動物を飼育することで子どもたちの情操を育むことを目的として実施されている。生き物に接したことのない子どもたちにとって生命の暖かさを知ることや命の大切さを学ぶこと、人との付き合い方を学ぶことにつながるなど、またこれらの変化が大きくあらわれるのが、動物の飼育場所に関わりがあることを明らかにしている。

第5章では、神奈川県立こども医療センターの事例について検討している。犬を介在させた取り組みは緩和ケアチームで実施されており、子どもたちの治療をサポートする一環として取り入れられている。犬の導入により子どもたちの負担が少しでも軽減されることや病気に立ち向かう気力につながることを明らかにしている。

第6章では、マンダラ (Mandalah・ブラジルのサンパウロにあるコンサルティング会社) の事例について検討している。経営手法の一つとして大型犬を会社犬として導入することで、スタッフ同士のコミュニケーションが活発になるなどプラス効果があり、飼育後に明らかに生産性が向上したことを明らかにしている。

第7章では、株式会社ナビバードの事例について検討している。スタッフの癒し、団結力をサポートすることや犬を用いた情報発信をおこなう目的で犬を導入している。犬のまわりにスタッフが自然と集まり犬を介して会話をはずませることが多くなったことからスタッフ同士のもめごとが減少し、職場が和むようになった。そして、スタッフ同士の良き関係が築かれたことにより、離職率の減少や仕事の能率の向上が見られたことを明らかにしている。

第8章では、美容室アンズヘアーの事例について検討している。美容部員の癒しと経営手法の目的で犬を導入している。スタッフ同士の仲間意識が犬を媒介にして強力なものに

なったことでスタッフの離職が減少したことや、犬好きの顧客が増えリピート率が高まったことを明らかにしている。

第9章では、介護老人保健施設 若草園の事例について検討している。入所者の QOL (quality of life : 生活の質) の向上のためセラピー犬を導入しアニマルセラピーを実施している。利用者が犬を抱擁したり触れたりすることでリハビリのさらなる効果があったこと、スタッフにとっては犬にふれることで鬱屈した気分を解消することができ仕事が円滑におこなえることを明らかにしている。

第10章では、子どもたちの抱える問題に着目し、先行研究をもとに子どもの成長過程で動物にふれることで得られる利点などを明らかにしている。そして、次章の第11章と第12章で実施されている教育機関での動物介在プログラム事例を検討する前に用語の概念を明らかにすることを試みた。まず、公益社団法人日本獣医師会などが述べている動物介在教育の定義を考察し、動物介在教育を構成する概念要素を検討している。つぎに、学校での動物介在教育の現状を考察するため、日本ではじめて学校犬が認定された経緯について検討している。

第11章では、川東中学校の事例について検討している。新潟県五泉市にある川東中学校は、荒れた学校であった。それを解決する一つ的手段として弱い立場の動物(犬)を導入することになった。導入にあたり教育委員会への説明、保護者への承諾、金銭の問題などについて、導入後の犬の飼育、学校での活用方法について分析をおこなっている。学校犬を導入することで、子どもたちが毎日学校に行くのが楽しくなったことや何事にも積極的になり学力向上につながったことを明らかにしている。

第12章では、尾道高等学校の事例について検討している。広島県にある尾道高等学校ラグビーフットボール部で犬を導入した経緯は、校舎に迷い込んだ野良犬を救いたい一心で部員のひとりが監督に直言したことが始まりである。導入にあたり、職員会議での議論、近隣住民への説明、保護者への承諾について、導入後の犬の飼育や活用方法について分析をおこなっている。犬を導入したことにより、弱者に対していたわりを持つ心を育てられたことや犬の世話が毎日の習慣づけになったことで、子どもたち自身が生活の規律を守る大切さを学ぶことにつながったことなどを明らかにしている。

第13章では、動物介在プログラムの社会的利用を検討するために筆者がおこなう社会活動3点をもとに分析し、単発型と継続型動物介在プログラムの意義を明らかにしている。

第14章では、これまでの動物介在プログラム事例をもとに動物を介在したコミュニケーションについての考察や動物介在プログラムの組織的機能の形成過程の検討をおこない動物介在プログラムの導入の意義について明らかにした。そのうえで、事例検討から得られた知見をもとに、今後組織へ動物介在プログラムを導入するに当たり注意する事項を提唱した。

最後に終章において、本論文の独自性を三つの意義として提示したあと、今後に残された課題について言及した。

(文字数 : 3766 字)